

はじめに

ギリシア神話にオイディプスの物語がある。

これは、現代でも演劇の作品として上演されることがあるので、多くの人たちがどういふ物語なのかを知っていることだろう。

オイディプスは王家に生まれるが、将来、父親を殺し、母親と交わると予言された。恐ろしい予言だ。王は、この予言を聞いて、生まれた子どもを従者に捨てさせる。ところが、従者は、子どもを殺すのは忍びないと考え、羊飼いに渡してしまう。それでオイディプスは生き延びることとなる。

だが、それが悲劇のはじまりだった。オイディプスは、予言通りの道をたどることになるからだ。

オイディプスは、それと知らないまま、父親の王を殺害してしまう。それによって王となり、母親と交わる。そのことが明るみに出ると、母親は自殺してしまう。

精神分析学の創始者、ジークムント・フロイトが、この物語から、「エディプス・コンプレックス」の概念を導き出したことは、よく知られている。日本では、神話についてはオイディプス、フロイトの概念についてはエディプスと表記されることが多い。フロイトは、子どもには、父親をなきものとし、母親を独占しようという根源的な欲望があるが、それは、強力な父親の前に抑圧されると説いたのである。

オイディプスが王を殺害してしまつた後、怪物のスフィンクスを退治することになる。スフィンクスは、ギリシアの神話だけではなく、メソポタミアやエジプトの神話にも登場する。その巨大な像は、エジプトのギザにあり、その背後にはカフラー王のピラミッドが聳そびえている。

スフィンクスは、「朝は四脚、昼は二脚、夜は三脚で歩くものは何か」という謎かけをして、それが解けない人間たちを食い殺していた。オイディプスは、この謎かけに対して、「人間だ」と答える。

人間は、赤ん坊の時期にははって四本脚で歩き、成長すると二本脚で立って歩けるようになる。老いると、杖をつくようになり、それで三本脚だというわけである。謎を解かれたスフィンクスは、山から身を投げて死んでしまう。

スフィックスの謎かけは、オイディプスには通用しなかったわけだが、この問いには、人間というものの本質が示されている。

人間は、他の動物とは異なり、生まれてすぐに立つことができない。個人差はあるが、立てるようになるまで一年はかかる。人間は保護されなければ生きられないよう、最初から定められている。自分を育て、守ってくれる家族や共同体が欠かせないのだ。

そして老いれば、杖という道具に頼らざるを得ない。だが、それができるのは、やはり動物のなかでも人間に限られる。老いは、どの動物にも共通して訪れることだが、道具を使ってそれを乗り越えられるのは人間だけである。要するにスフィックスは、人間に対して、お前たちの本質は何かを問いかけたのである。本質的な問いであるにもかかわらず、人間は、うまくそれに答えられないのだ。

このスフィックスによる謎かけから、本書のテーマである「大和魂」の話をはじめたのは、日本人にとって、解くことが難しい重大な問いがあり、今やそれを解くことが求められているからである。

それは、名著として名高い新渡戸稲造の『武士道』の冒頭に出てくるものである。

新渡戸は、『武士道』を刊行する一〇年ほど前、ベルギーで法学の大家であるド・ラブ

レーという人物の家に滞在したことがあった。その際、ある日の散歩の途中、話題は宗教の問題に向かったという。

そのとき、新渡戸はド・ラブレールから、「あなたのお国の学校には宗教教育はない、とおっしゃるのですか」と尋ねられた。

この問いに対して、新渡戸は、「ありません」と答えてしまった。するとド・ラブレールは、突然立ち止まり、「宗教なし！ どうして道徳教育を授けるのですか」とさらに尋ねてきたのだった。

この問いに対して、その場で新渡戸はうまく答えることができなかった。だがそれは、重大な問いだ。その後新渡戸は、日本人の道徳の源泉に何があるのかを問う作業を続け、そこで、武士道に行き着いた。新渡戸が武士の家の生まれであったことが、そこに影響した。

新渡戸が問われたのは、日本人の道徳の根源がどこに求められるのかということである。それは、日本人の精神の拠り所となるものは何かという問いでもある。

今、新渡戸が問われたことを、同じように外国人から問われたとしたら、私たち日本人はどのように答えるのだろうか。幸い、新渡戸は『武士道』の本を残してくれているので、

それに従って、「武士道があります」と答えればいいのだろうか。

そこには問題がある。新渡戸は、『武士道』のなかで、「武士道は一の独立せる倫理の掟おきてとしては消ゆるかも知れない」と述べており、武士がいなくなった近代の社会では、武士道が滅びていかざるを得ないことを認識していた。

『武士道』が英語で刊行されたのは一八九九年のことで、それからすでに一二〇年の歳月が流れている。武士道は、新渡戸の時代以上に過去のものとなってしまった。『武士道』が書かれたころには、まだ、かつて武士であった人間が日本には存在した。だが、今は、武士であった人間は一人も残っていない。軍隊を経験している人間でさえ、ほとんどいなくなっている。

その点で、新渡戸が問われた事柄は、スフィンクスによる問いとは異なり、未だに正しく答えられていないことになる。

その問いは、極めて重要なものであり、現代になればなるほど、その重要性は増している。だからこそ、現代においても、『武士道』が読み継がれているのではないだろうか。私たち日本人の精神の拠り所を求めて、読者は、未だに『武士道』を手取るのである。

『武士道』の本についてはいろいろと興味深いところがある。ここで注目しなければなら

ないのは、その英語による原題である。原題は、“Bushido: The Soul of Japan”というものだった。

現在までに、『武士道』はさまざまな形で翻訳されている。おそらく、もっとも広く読まれているのは、戦後、東京大学総長もつとめた矢内原忠雄やないはらが訳した岩波文庫版だろう。これは戦前の一九三八年に刊行されている。

原題と岩波文庫版のタイトルとを比較したとき、はつきりしているのは、翻訳では、“The Soul of Japan”という副題が削られていることである。これは、他の『武士道』の翻訳にも共通して見られることで、副題がタイトルに含まれているものはない。

『武士道』の最初の日本語訳は、一九〇八年の櫻井鷗村によるものだが、そこでも、タイトルは『武士道』となっており、副題は含まれていない。それが、今日にまで受け継がれた形になっている。

“The Soul of Japan”を訳せば、「日本の精神」となる。だがそれは、「大和魂」と訳すこともできる。『武士道―大和魂』という邦題にすることもできたはずである。『武士道』と『武士道―大和魂』とは、受ける印象はかなり異なるのではないだろうか。

一八八〇年に来日し、一九一二年まで日本に滞在したフランス人のカトリックの神父に、

アルフレッド・リギョール（あるいは、リギョールとも）がいた。リギョール神父は数多くの著作を発表しているが、それらは、彼の弟子となった司祭の前田長太などの手によって翻訳されている。内容は多岐にわたり、キリスト教の信仰についてだけでなく、家庭や教育、人生論に及び、冊数は約八〇冊にも達した（山梨淳「近代日本におけるリギョール神父の出版活動とその反響」『カトリック研究（79）』二〇一〇年）。

リギョール神父が一九〇一年に刊行したものに、『倫理叢書 文明之武士』という著作がある。翻訳者は前田である。この本の第一章は「武士道と大和魂」と題されていて、冒頭の部分では、新渡戸が『武士道』を英文で刊行したことが紹介されている。リギョール神父は、『武士道』が日本の読書社会において好著として迎えられたとしてはいるが、同時に、英文のため、多くの日本人はこれを読むことはできないとも述べている。このリギョールのものが、『武士道』について書かれた最初の本になったのではないだろうか。

リギョールの本のなかで、大和魂という訳語が用いられているのは、前田の考えによるものだろう。原文は確認できていないが、リギョール神父は、フランス語で『Esprit japonais（日本の精神）』と書いていたはずである。“Bushido”の副題がそうになっていたからだ。

新渡戸は、日本人の道徳の根源を尋ねてきたド・ラブラーの問いに答えることができなかった。ド・ラブラーは、キリスト教の信仰にもとづいて、道徳の根源には宗教がなければならぬと信じていた。新渡戸も札幌農学校の学生だった時代にキリスト教に入信している。それ以降、生涯にわたってその信仰を捨てなかった。その点で、ド・ラブラーの見解に賛同するところは大きいにあつたはずだ。

だが、日本ではキリスト教は大きくは広がっていない。日本人全体が、キリスト教にもとづく道徳観を共有しているわけではない。

では、神道や仏教が、ヨーロッパのキリスト教と同じ役割を果たしているのだろうか。新渡戸にはそうは考えられなかった。それは、現代の私たちにも共通している。もし、私たちの目の前にド・ラブラーがふたたび現れ、新渡戸に対して発したのと同じ問いを投げかけてきたら、私たちはどのように答えるのだろうか。私たちは、それに対して答えを持っているのだろうか。

道徳の根源にあるものは、善とは何か、悪とは何かを規定する。それは、私たちの生き方と深くかかわっている。

新渡戸がその点について深く考えなければならなかったのは、日本が明治の時代になり、

近代化を進めていくことが急務となったからである。日本の前には、近代化をすでに果たしていた欧米列強が立ちはだかつていた。欧米列強に追いつくことが、近代日本国家の最大の目標だった。

近代化は、たんに産業をもり立て、社会制度を整備していくことだけでは実現されない。近代化を進めていく社会に生きる人々の精神のあり方というものも、古い封建的なものから、新しい近代的なものに刷新されていく必要があった。

江戸時代の武士社会においては、儒教が道徳観の根底に据えられていた。新渡戸は、そうした武士社会の道徳を、武士道としてとらえ直すことで、それがキリスト教の信仰を基盤としたヨーロッパの「騎士道」に匹敵する高度な精神性を持つものであることを証明しようとした。

その試みは、一応の成功をおさめ、『武士道』は各国語に翻訳された。岩波文庫版におさめられた「増訂第十版序」（一九〇五年）において、新渡戸は、『武士道』がインドのマラータ語、ドイツ語、ボヘミア語、ポーランド語に翻訳され、ノルウェー語、フランス語、中国語の翻訳も準備中であると述べていた。

そして、「ある信頼すべき筋からえた報知」として、アメリカのセオドア・ルーズヴェ

ルト大統領が、『武士道』を読み、友人たちの間に配ったということを知り、それを聞いたと述べている。ルーズヴェルトは軍人であり、その点で、武士の生き方、さらには、『武士道』で詳しく述べられた武士の死の方に共感したのであろう。

しかし、現代においては、日本人の道徳観の根本に武士道があると主張することは難しい。新渡戸も認めているように、そもそも武士が存在しなくなつて一五〇年が経つた。現在の日本社会において、道徳の源泉を武士道に求めることは時代錯誤と言われかねない。では、『武士道』の副題ともなつた大和魂の方はどうなのだろうか。

現代の社会では、グローバル化が著しく進行している。それは、平成の時代がはじまるとともに起こつた「ベルリンの壁崩壊」によつて東西の冷戦構造が崩れたことで、急速に進行した。とくにインターネットの発展は大きく、情報は瞬時に世界全体に伝えられるようになった。人の流れ、金の流れも、国を越えて世界に広がつた。

日本にも多くの人が海外からやつてきて、在留する外国人も大幅に増えてきた。その一方で、少子高齢化によつて、日本は人口減少社会に突入している。コロナウイルスの流行によつて社会不安が高まるという事態も起きている。そうなると日本という国の力はひたすら衰えていくのだろうか。それを放置してしまつていいのか。そうしたなかで、自分た

ちのアイデンティティーをどこに求めたらいいのだろうか。日本人らしさということを手
ってしまっていないのだろうか。そうしたことを改めて問わざるを得ない状況に立ち至って
いる。

日本人の精神、日本人の魂は、これからどこへ向かっていくのだろうか。大和魂のゆく
えを確かめることが、この本の課題なのである。

次の立ち読み箇所に移ります

第三章 国学、本居宣長が考えたこと

知性と知恵

江戸時代の国学者、本居宣長の歌に「敷島の大和心を人間はば 朝日に匂ふ山桜花」というものがある。

これは、宣長が六一歳のときに描いた自画像に記された画賛である。それは、一七九〇（寛政二）年のことだった。

宣長はもう一枚、四四歳のときにも自画像を描いている。一七七三（安永二）年のことで、そちらの画賛には、「めづらしきこまもろこしの花よりも あかぬ色香は桜なりけり」の歌が含まれている。

六一歳の自画像では宣長の座る姿が描かれているだけである。四四歳のときのものと、宣長の前に机が置かれ、机の上には書物があり、一冊は開かれている。脇には硯がある。机の前には花瓶に桜の花がいけられ、花は咲いている。中年にさしかかった宣長はその桜を愛でているかのように見える。色香とあるところからすれば、その香りも楽しんでいることだろう。桜は山桜である。

宣長六一歳の歌を見て気づく人もいるはずだ。この歌のなかに登場する「敷島」「大和」「朝日」「山桜」は戦前のタバコの銘柄である。敷島が発売されたのは日露戦争がはじまっ

た直後で、タバコから得られる税金を通しての戦費調達という目的があった。大和、朝日、山桜も同じときに発売されている。値段は敷島が一番高く八銭で、その点では高級タバコだった。大和は七銭、朝日は六銭、山桜は五銭だった。

敷島、大和、朝日は、戦前の日本で製造された戦艦の名称でもあった。第二次世界大戦末期に沈没した大和は、日本の戦艦のなかでもっともよく知られている。ただし、山桜という戦艦は生まれなかった。

さらに、戦争末期の神風特攻隊の部隊名も、敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊と名づけられた。宣長の歌は、近代の日本社会では、戦争と深く結びついていた。

そこには、戦前における宣長の歌に対する評価が関係している。宣長の歌は、戦争に臨のぞんだ日本人の精神を鼓舞するものとしてとらえられたのである。

ただし、宣長が使ったのは「大和心」であり、「大和魂」ではない。この二つのことは、同じことを意味していると解釈されるかもしれないが、その点は検証する必要がある。

前の章では、大和魂ということばの初出が、『源氏物語』の「少女をとめ」の帖に求められることを確認した。

では、宣長が歌に詠んだ大和心はどのようなのだろうか。

大和心の初出は一〇八六（応徳三）年に完成した勅撰和歌集『後拾遺和歌集』に含まれる赤染衛門の歌、「さもあらばあれ大和心しかしこくは ほぞちにつけてあらずばかりぞ」であると言われている。

赤染衛門は平安時代中期の女性歌人で、中古三十六歌仙や女房三十六歌仙の一人にも選ばれている。夫は文章博士だった大江匡衡で、この歌も、匡衡の歌に対する返歌として詠まれたものである。文章博士は、大学寮紀伝道の教官のことで、詩文と歴史を教えた。菅原道真が文章博士であったことはよく知られているが、平安時代後期以降は、菅原氏、藤原氏、そして大江氏がその職を独占し、世襲した。

『後拾遺和歌集』では、匡衡の歌の前に、「乳母せんとして、まうで来たりける女の、乳の細く侍りければ、詠み侍りける」という題詞があり、匡衡の歌は、「はかなくも思ひけるかなちも無くて 博士の家の乳母せむとは」というものだった。乳母として雇った女性は、十分に乳が出ないように見えたというのだが、「ち」は乳とともに知とかけられている。文章博士というインテリ家庭に入るには、知性が足りないというのだ。

それに対して赤染衛門は、たとえ乳が細く、知が足りていなくても、大和心さえ賢いのであれば、赤ん坊をまかせても大丈夫だと反論しているわけである。

この大和心ということばの使い方は、『源氏物語』における大和魂の使い方と共通している。どちらも、知性に対する知恵の意味で使われている。知性は学問の研鑽を通して身につくものだが、知恵はその人間に生来備わっているとされるものである。赤染衛門の歌では、知恵の方が知性よりも重要だとされている。となると、大和心と大和魂とは意味として同じであるということになる。

『今昔物語集』にも、知性と知恵とを対比させる話があり、そこでは、大和魂は「和魂」という形で出てくる。それは、巻第二九第二〇「明法博士善澄、強盜に殺されし語」である。

今は昔のことである。明法博士で大学寮の教官だった清原善澄きよはらのよしずみという者がいた。法律について研究する明法道の才能は申し分がなく、過去の博士にも劣らない力を持っていた。そのため、七〇歳になっても、世の中で活躍していた。ただ、家はかなり貧しくて、生活にも不自由していた。

そんなとき、住んでいた家に強盗が入り込んできた。善澄は、そこはうまくやって逃げ、板敷の下に隠れることができた。そのため、強盗には見つからずにすんだ。強

盗は、家に上り込んで、勝手に物を取ったり、壊したりして、大騒ぎして出ていった。そのとき、善澄は隠れていた板敷の下から急いで出てきた。まだ強盗がいるのに、門のところまでやってきて、声を上げ、「やい、お前たちの顔はすっかりと見た。夜が明けたら、検非違使の別当に言つて、片端から捕えてもらうぞ」と、たいそう腹を立てながら叫び、門を叩いて言つたものだから、強盗はそれを聞きつけ、「聞いたか、戻つて打ち殺してしまおう」と言つて、ばたばたと走つて戻つてきた。善澄はあわてて家に戻り、また板敷の下に急いで隠れようとしたが、慌てていたため、額を縁にぶつけ、隠れることができなかつた。盗人は、走つて戻り、善澄を引きずり出すと、太刀で頭を散々に切りつけ、殺してしまつた。強盗はそれで逃げてしまつたので、そのままになつてしまつた。

世間の人たちは、善澄の学問の才能はかなりのものだったが、和魂に欠けていたので、こんなばかなことを言つて死んでしまつたのだと、その振る舞いを非難したと語り伝えられている。(以上、筆者による意識)

『今昔物語集』の場合、滑稽な物語でも、それは教訓を引き出すために用いられており、

この話でも最後の部分の原文には、「善澄、才さいはいみじかりけれども、つゆ和魂やまとたましひ無かりける者にて、かゝる心幼き事を云ひて死ぬるなりとぞ、聞きと聞く人々に云ひそし謗られけるとなむ語り伝へたるとや」とある。

明法博士は法律の専門家で、大学で律令や格式を教えた。格式は律令を補助するものである。善澄が明法博士である以上、学問の才能には秀でている。ところが、和魂つまりは知恵には欠けていたというのである。

反知性主義の伝統

こうした大和魂、あるいは大和心について見ていくと、現代の私たちは、トランプ大統領が誕生した際に話題になった「反知性主義」をめぐる議論を思い出す。

その際には、反知性主義は主に知性の欠如としてとらえられた。トランプ大統領には知性のかけらも見られないというのだ。しかし、反知性主義ということばを生んだアメリカの歴史学者、R・ホーフスタッターは、そうした意味で反知性主義ということばを使ったわけではない。

ホーフスタッターは、『アメリカの反知性主義』（邦訳はみすず書房）という本を書いてお

り、この著作の原題は、“Anti-intellectualism in American Life”であった。ホーフスタッターの言う反知性主義は、知性や知的な権威、さらにはエリート主義の立場をとる知識人に対して懐疑的、批判的な主張、思想のことをさしていた。知性の欠如ということではなかったのだ。

『アメリカの反知性主義』を翻訳した田村哲夫は、トランプ大統領が誕生した際にインタビュに答えているが、アメリカにおける反知性主義は、「『知能』を重視しても『知性』を軽蔑し、さげすむことであり、学者や科学者、ジャーナリストなどが批判の矛先となってきた」と語っている。その上で田村は、トランプが勝利したのは、その知能、「インテリジェンス」にあったと分析している。

田村は、トランプは、たんに自分の感性や感情をそのままことばにして表現しただけではなく、「こういえば、受ける」ということを計算し尽くした上で臨んでおり、人を説得する技術こそが「インテリジェンスの大きな武器の一つ」だというのである（「トランプ勝利の根因、『反知性主義』とは何か 『知能』が『知性』を打ち負かした」『東洋経済オンライン』二〇一六年一月二十九日付）。

もう一人、トランプと反知性主義の関係について論じているのが国際基督教大学学務副

学長の森本あんりである。森本には、『反知性主義—アメリカが生んだ「熱病」の正体』（新潮選書）という著作がある。森本も、「政治の素人で、憎悪や偏見に満ちた過激な発言を繰り返すトランプ」が支持されてきた背景に反知性主義の存在を見ている。

トランプは、「反ワシントン」や「反エスタブリッシュメント」をスローガンに掲げたが、森本によれば、こうした主張は一九世紀以来何度もアメリカに現れてきたという。反知性主義は、知性そのものではなく、知性と権力との結びつきが固定化されることへの反発であり、その源流は、アメリカの独立前から盛んになったキリスト教の「リバイバルズム（信仰復興運動）」にあるというのである（「大統領選トランプ現象、反知性主義の伝統」『中外日報』二〇一六年四月二七日付）。

アメリカで、このリバイバルズムの流れをくんでいるキリスト教徒は、「福音派」と呼ばれる。福音派という言い方をすると、キリスト教のプロテスタントにおける一つの宗派のように思われるかもしれない。だが、英語では“Evangelical”であり、むしろ「福音主義」と訳した方が実情にあっているかもしれない。現代のアメリカでは、福音派という言葉の方は広く使われており、科学的な見方を許容する「自由主義神学」とは対立関係にある「原理主義」の傾向が強い人々のことをさしている。福音派は、聖書に書かれていること

を文字通りに信じ、学校で子どもたちに進化論を教えることや、人工妊娠中絶に反対する。進化論は神による創造を否定することになるし、神は、墮落した人間たちを大洪水で一掃した後、生き残ったノアとその息子たちに「産めよ、増えよ、地に満ちよ」と告げているからである（「創世記」）。その点で福音派は、キリスト教の教えに徹底して従おうとする「キリスト教原理主義」としてもとらえられる。現在では、「イスラム教原理主義」に注目が集まっているが、その元はキリスト教原理主義である。

現代のアメリカでは、福音派が人口全体の二五パーセント程度に及び、一大勢力を築いている。だからこそ、トランプ大統領を誕生させたのであり、かつてはロナルド・レーガンやブッシュ父子といった共和党の大統領を生んできたのである。

大和心や大和魂の強調は、知恵を知性よりも重視する点で、日本的な反知性主義としてとらえることができる。したがって宣長は、反知性主義の立場にたつ思想家であったと見ることができるのである。

市井の人間として生きる

宣長は、古事記に対する注釈書であり、ライフワークともいえる『古事記伝』を一七

六四（明和元）年から書きはじめ、九八（寛政一〇）年に脱稿している。脱稿した年に『うひ山ぶみ』という著作を刊行している。これは、入門したての門人に、宣長がもつとも重視する「まことの道」について解説したものである。

『うひ山ぶみ』のなかで宣長は、めざすべきは「道の学問」であるとし、その道とは、天照大神が定めたものであるとする。宣長は、道の学問を進める上で重要な事柄について、「また件の書どもを早くよまば、やまとたましひよく堅固まりて、漢意におちいらぬ衛にもよかるべき也。道を学ばんと心ざすともがらは、第一に漢意、儒意を清く濯ぎ去りて、やまと魂をかたくする事を要とすべし」と述べている。

ここに「やまとたましひ（魂）」が登場する。大和魂をかためることが漢意に陥らない予防策にもなるので、道を学ぼうという志を持つ人間は、漢意や儒意をさっぱりと洗い落とし、大和魂を堅固にすることが肝要だというのである。

ここでも、大和魂は漢意と対比されている。大和魂は、中国の思想や、儒教の考え方にもとづく知性とは異なる、日本人に固有な知恵のあり方を意味している。まさにこれは、日本的な反知性主義の宣言である。

宣長は、一七三〇（享保一五）年に、伊勢の松坂（現・松阪市）に生まれた。父は小津三

大和魂のゆくえ

島田裕巳・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：本体 960 円 + 税

発売日：2020 年 6 月 5 日

ISBN：978-4-7976-8054-6

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)